



きんぎ

今月の内容

- 1面** 更年期障害
- 2面** 第6回市民公開講座
- 3面** チーム医療
防火・防災訓練
- 4面** 地域ねっとわーく

公立学校 近畿中央病院
共済組合

発行：広報委員会 〒664-8533 兵庫県伊丹市車塚3-1
病院長：有田 憲生 ☎(072) 781-3712 代表

2016年4月 / 第94号

○更年期障害の原因、症状

原因として卵巣から分泌される女性ホルモン（エストロゲン）の低下で起こります。その分泌調節は、脳内の視床下部・下垂体と言われる部位で行っています。自律神経中枢もこの視床下部に存在している為、この不具合が自律神経にも影響してきます。

更年期障害の症状は、分類すると自律神経失調症、分類的状況、その他の3種類に

○はじめに

日本人女性の平均閉経年齢はおよそ50歳といわれています。そして女性の更年期とは、閉経の前後5年間です。この時期に現れる多種多様な症状の中で、器質的変化に起因しない症状を更年期症状と呼び、これからの症状で日常生活に支障をきたすものを更年期障害と定義します。（不定愁訴）

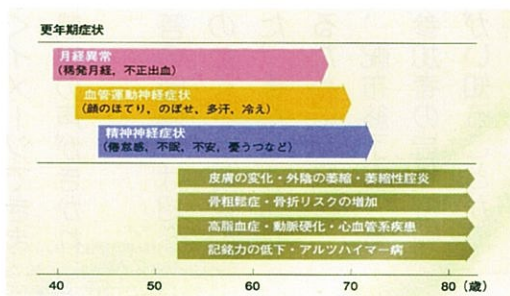
女性はこの時期、卵巣機能（女性ホルモン）の低下に伴う身体的変化と子供の巣立ち、老親の介護や死亡、職場での昇進やリストラ、夫の定年など精神的、社会的文化的、心理的な環境の変化などが複合的に影響することにより発症します。



婦人科部長
山田 幸生

II 気になる加齢シリーズ II 更年期障害

分けられますが、自律神経失調症状が特に多く認められます。具体的には以下のような症状が代表的です。



若林 晶, 久保田 俊郎, 治療, 2007, 89(10), p.2847-2851より改変引用

- ① 自律神経失調症状としては顔のほてり、のぼせ（ホットフラッシュ）、異常発汗、動悸など血管運動神経症状
- ② 精神的症状として情緒不安定、イライラ、不安感、抑うつ気分、不眠
- ③ その他として腰痛、関節痛、肉痛など運動症状、嘔吐、食欲不振など消化器症状、乾燥感、湿疹など皮膚症状

排尿障害、頻尿、外陰部違和感などがある。

○更年期障害の診断

a 更年期指数
日本産科婦人科学会生殖、内分泌委員会が1999年に発表した更年期スコアが現在の日本人女性の更年期障害の評価に適しています。

b 血液検査

閉経の診断は更年期女性において12か月以上の無月経が続いた場合に確定します。12か月未満の場合は、下垂体ホルモン（FSH）の上昇と女性ホルモン（E2）の低下によって診断します。

但し器質的疾患を除外するため、血算、肝機能、腎機能検査、甲状腺機能検査を併せて行うのが良いでしょう。

c 鑑別診断

更年期障害の診断は、器質疾患の除外が前提となります。特に鬱、悪性疾患の判別が必要で、また甲状腺機能障害は亢進、低下ともに類似する症状があります。また元来、自律神経失調症である場合も判別が必要となります。

○更年期障害の治療

薬物療法にはホルモン療法（HRT）、漢方療法、向精神薬などがあります。非薬物療法には心理療法、

食事療法、運動療法などがあります。

a ホルモン療法（HRT）

b 漢方療法：当帰芍薬散、加味逍遙散、桂枝茯苓丸により更年期症状のかなりの部分力バーできる。

c 向精神薬：選択的セロトニン（SSRI）、精神安定剤、催眠剤

更年期障害は女性に起こる一時的な精神、身体症状です。それぞれの症状に見合った治療を、必要な期間、医師とご相談のうえ進めてください。

	漢方療法	ホルモン補充療法 (HRT)	向精神薬 (SSRIなど)	カウンセリング、心理療法
長所	<ul style="list-style-type: none"> ●知名度が高い ●副作用が少ない ●種類が豊富である ●複数の生薬を含むため一剤で幅広い対応が可能 	<ul style="list-style-type: none"> ●一般的に有効性が高い ●他の進行期疾患（骨粗鬆症・高脂血症など）にも効果がある 	<ul style="list-style-type: none"> ●心理的背景を持つものみならず、一般的に有効性が高い ●比較的安全 	<ul style="list-style-type: none"> ●心理的背景を持つものに効果が高い ●安全
短所	<ul style="list-style-type: none"> ●症の問題—どの漢方剤を選択するか？ ●切れ味が悪い—8～12週間の服用が必要 ●飲みにくい 	<ul style="list-style-type: none"> ●副作用の問題 <ul style="list-style-type: none"> ・乳癌、子宮体癌、卵巣癌（？） ・血栓症、脳卒中 ・出血 ・肝機能障害、凝固能異常 ・マイナートラブル（乳房痛、痛風など） ●保険の問題 	<ul style="list-style-type: none"> ●副作用の問題—消化器症状など ●効果発現までに時間がかかる ●薬剤相互作用に注意が必要 ●服薬への心理的抵抗感 	<ul style="list-style-type: none"> ●治療へのモチベーションが難しい ●治療への心理的抵抗がある ●専門的知識と経験が必要 ●治療時間とスペース、スタッフの確保が必要

高松 隆, 他, 産婦人科治療, 2004, 89(4), p.408-415より改変引用